

〔特別講演〕

千葉大学医学部（母校）への感謝

千葉大学 名誉教授 永野俊雄

1930年生まれの筆者が本学に入学したのは1951年である。それから、卒業、大学院、教官、留学、教授となって、1996年定年になるまで、人生の大半、40年以上母校と共に過ごした。また定年後も大学の行事には出来るだけ参加した。

私の学部学生時代に専門教育を受けた沢山の恩師、大学院専門科目（解剖学）指導教官であった鈴木重武、森田秀一、野中俊郎、黒住一昌の諸先生に感謝の意を捧げたい。また留学中に、当時最新の研究（電子顕微鏡、その他）の指導を受けたH. S. Bennett教授へ感謝し、その他多くの友人に恵まれた。

創立135周年を迎え沢山の同窓生がいる本学で、数千人の医学部学生と接し、微力ながら研究指導した方々は私の生きがいであり、誇りである。

以下、私見ですが、中山恒明、多田富雄両先生から最も印象を受けました。勿論、中山先生からは、臨床講義とポリクリだけ教えを受けました。その外来患者さんと学生への説明、自信に満ちた手術のデモは今でも鮮明に記憶している。多田先生は大学院時代に解剖と病理教室の関係からお付き合いしました。彼は文学部から本学に來られました。典型的な夜型で、明るい時は恐らく謡曲や鼓をやっていたのでしょう。一転暗くなってから、免疫の実験と大学院生の指導を明るくなるまでやっていました。彼の実験結果からレポートにまとめる能力に驚きました。両先生とも専門領域

で世界的な指導者となられた。そのほか、川崎病の川崎富作先生や白壁彦夫先生がおられますが、小生は直接警咳に接したことはありません。

私の教授として在職中に、特に目立った学生の一人は箕島聡さんで、彼はパソコンボーイで、パソコンが始まった頃、本を出版しました。学部卒業（1987）、大学院修了後、アメリカに留学し、合衆国医師免許を取りました。彼のコンピュータプログラムを用いたPET研究から脳血流を画像として示した。現在Univ. of Wash. 放射線科の教授で活躍している。もう一人は出澤真理さん（1989卒）で、彼女の父親は電子顕微鏡による複眼の研究者でした。彼女が入学以来、知っていました。人体生体移植に代わる再生治療法を目標にしていました。現在は東北大学で幹細胞の研究し、再生医学への応用を研究しています（文科大臣学術奨励賞受賞）。

この伝統ある千葉医学会に、講演を依頼され、光栄に思っています。まるで最終講義を2回やるような気持ちです。学生諸氏は、医師になることは約束されていますが、さらに各方面リーダーとなるような活躍されることを切望しています。

終わりに小生が健康を害したとき、とくに狭心症（55歳）の時、第3内科（循環器科）の稲垣義明教授そのほかのおかげでOp.をしなくて全治しました。昨年は白内障の手術もして頂きました。病院の皆さんに感謝しています。